

志布志城跡(内城跡) 縄張図 用語集

用語	解説
くるわ 曲輪	郭とも書き、山城の中に造られた平坦面を指します。志布志城では上下の2段に分かれ、土塁や虎口を備えます。 内城跡では、曲輪1を矢倉場、曲輪3を本丸、曲輪4と5を中野久尾、曲輪6と15を大野久尾と呼んでいます。
うちじょう 内城	曲輪3上段。内城の中心となる曲輪で、戦闘時にたてこもる領主の館が存在しました。本丸または本丸上段と通称され、曲輪2が本丸下段と通称されています。『志布志記』には、内城の説明に「古城三ツ」として、内城、中野久尾、大野久尾が記されています。
やぐらば 矢倉場	曲輪1。矢倉(櫓)とは、防御のために弓矢などの武器を備えた建物を指し、見張りのために高い建物となっていました。『志布志記』では内城の端に「矢倉の場」があったことが記されています。このことから曲輪1には、防御や見張りのための建物があったと考えられます。
なかのくび 中野久尾	曲輪4および曲輪5の区域を指します。上下段に分かれ、土塁や虎口がよく残っています。「のくび(野首・野久尾)」は、「細く、せまくなっている土地」の意味だと言われています。
おおのくび 大野久尾	曲輪6および曲輪15の区域を指します。以前は現在の地形から、ひとつの曲輪と考えられていましたが、発掘調査の結果、曲輪と曲輪の間の堀が埋められていることがわかりました。「のくび(野首・野久尾)」は、「細く、せまくなっている土地」の意味だと言われています。
やかた 館	現在の志布志小学校の位置に、領主の館がありました。この場所は江戸時代には地頭仮屋が置かれました。『志布志記』には「内城の鼻先、矢倉の場の下」にあり、「御座之間、大広間、御番所、祇候所、兵具蔵、焰硝蔵、役々詰所」があったと記されています。
やぐらだい 櫓台	防御や見張りに用いる高い建物(櫓)を建てるため、一段高くなっている場所です。櫓は土塁の上に建てられたと考えられ、土塁の上に櫓台が想定されています。
どるい どい 土塁(土居)	築城の際に山を削り残したり土を盛ったりして造られた防御のための壁です。内城では、城内を隠す「めかくし」のために山を削り残したものを土居と呼んでおり、土居d～gに、その特徴を見ることができます。
からぼり 空堀	水のない堀を指し、通路にも利用されます。一度に大勢が攻められないように曲がりくねり、せまくなったり広くなったりしています。 南西から北東にのびる空堀1と空堀2に対して、直角に交わる空堀4～6および空堀8によって、曲輪が区画されています。空堀7は内城を台地から切り離す役割を持ち、切岸と呼ばれます。
おおてぐち 大手口	大手とは城の正面を指し、城の正面入口を大手口、その門を大手門と言います。内城の南西、空堀1と2の端が大手口とされています。特に大手口aは内城全体の正面入口と考えられています。
からめてぐち 搦手口	搦手口は正面の大手に対する裏口です。内城には大手口のほかに、いくつかの入口がありますが、西(搦手口a)と南東(搦手口b)の2か所が本丸側面の搦手口と考えられています。

※『志布志記』：志布志の歴史、文物などが解説された古文書。天明3年(1783)に書かれたとされ、写本がのこされている。